

# 独裁者ゲームにおける「労働」\*

小川 一仁（大阪産業大学経済学部）

竹本 亨（明海大学経済学部非常勤講師）

高橋 広雅（広島市立大学国際学部）

鈴木 明宏（山形大学人文学部）

キーワード：独裁者ゲーム、実験経済学、労働

個人がどの程度の利他心を持つかは独裁者ゲームの実験により検証されている。独裁者ゲームの均衡では、独裁者は受取人に1円も抛出しないはずであるが金を分配し、被験者は実験者から与えられた額の13-50%を抛出している。既存の文献では、これが被験者の「利他心」だと解釈される。

ここで問題となるのは、独裁者ゲームにおいて独裁者がどのように初期保有を獲得するかである。独裁者ゲームでは最初に、独裁者と呼ばれるプレイヤーに対し実験者は分配するための一定の金額を渡す。しかし、このような分配金は「天から降ってきた」金であるために、ある程度金額を惜しげもなく受取人に渡す可能性は否定できない。

Cherry (2001) は独裁者ゲームの前に、実験者から与えられるくじの売買を行うことで独裁者ゲームにおける初期保有を獲得するという実験を行っている。しかしながら、Cherry (2001) には以下のような問題点がある。まず、このようなギャンブルに類似した方法による初期保有の獲得は、通常想定される労働とは異なる要素が混入している可能性がある。また、この実験では独裁者のみが売買を行っているため、受取人は労働を行わないという元の独裁者ゲームとは異なる非対称性が存在する。さらに、くじの取引終了後に一度報酬を独裁者に渡している。これは通常の独裁者ゲームと比較して、参照点が変化する（渡してしまうことでゼロにリセットされる）可能性がある。

本稿では、独裁者が初期保有を獲得するために、不確実性などの要素が混入していない、単純な「労働」を独裁者ゲームに導入し、「労働」によって抛出率がどのように変化するかを実験により検討する。さらに、受取人にも「労働」を行わせ、その成果が独裁者に伝えられる場合、独裁者の意思決定がどのように変わるかも検討する。実験の結果、主として以下のような結論を得た。

- 独裁者が労働している場合は、受取人の労働の有無は抛出率に影響しない。
- 独裁者が労働すると、抛出率は低下する。
- 独裁者に労働の成果を知らせる場合とそうでない場合では、受取人の労働の程度に差がある。

## 参考文献

Cherry, Todd L. (2001) "Mental accounting and other-regarding behavior: Evidence from the lab", *Journal of Economic Psychology*, Vol. 22, No. 5, pp. 605-615.

---

\*本稿は科学研究費補助金（基盤研究(C) 課題番号:18530226）による研究成果の一部である。また、京都産業大学大学院経済学研究科・私立大学学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター」『経済実験による研究と教育：実験から誰が何を学ぶか』（2006年～2008年）の支援を受けた。